

Title	漂流する 21 世紀の課題と展望 : 現代青年の社会的危機意識の構造
Author(s)	丸山, 久美子
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 235-247
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=906
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

漂流する21世紀の課題と展望

— 現代青年の社会的危機意識の構造 —

丸 山 久美子

The structure of social unrest in modern youth

Kumiko MARUYAMA

This paper presents a comparison of attitudes toward social unrest among Japanese youths in the 20th and 21st centuries. In 1998, German and Japanese university students the main causes of social unrest were those of environmental pollution and crises in politics and economics,. The key to these crises is the problem of organized crime. This problem will be come increasingly important throughout the world in the near future. In 1999, we compared attitudes toward social unrest between Irish and Japanese university students. We were unable to find anything in common between them.

Both German and Japanese youths seem quiet on the surface, but they have many serious problems on their minds in spite of their shared optimistic outlook. At the beginning of the 21st Century, there have been many momentous incidents, multiple acts of terror in the USA (possibly perpetrated by Islamic terrorists related to Osama Bin Laden, a leader of Islamic terrorism and militant conflict). Religious fanaticism and various kinds of ideology have led to terrible violence which might reveal the mindset of terrorists.

In most nations of the world not only in Japan, there have been financial crises, food crises, and confusion. There are differences in economic and social status between people (kakusashakai in Japanese). There is a need to probe more deeply into attitudes toward the global crisis not only among young, but also the aged.

These problems are discussed from psychological point of views.

Key words: Spirituality , Terrorism, Changes of value, Global environmental pollution

1：はじめに：

20世紀末の社会を眺望するとき、この時代は青年たちの中心的核となる理念や思想が拡散して、デラシネ的漂流がある種の層となって渦巻き、それらが随所に蔓延した社会が形成されているように見える。特に日本は経済的繁栄から突如バブル崩壊という未曾有の経験を味わい、これまで安閑と生きていた青年達の間に格差社会が生まれ、ニートと呼ばれる無気力な青年達、フリーター指向の若者がいつの間にか年を取り、ホームレスまがいのインターネット・カフェ難民となり、それに追隨する風潮として多くのネット・カフェ難民が若者達の間に増加した。何も好き好んで、そのような難民となる必要はないのにと大人たちは胡散臭げに彼らを一瞥する。このような社会風潮をみて、若者・弱者に希望を与えない社会構造が生み出されたと社会学者は警告するようになった。

格差社会という名称が彼らを脅かし、ますます脆弱な環境で生育した内向的な青年達は家に引きこもり、「ニート」となった。日本の家庭はニートになったか細い子供たちを家の中に匿ってくれる。これは外国には見られない現象で、西欧諸国の家族はニートになった子供を外に追いやり振り向きもしない。すてられた子供たちは若年ホームレスとなる。イギリスの若年ホームレスは25万人に対して、日本は高々5千人であるという（斉藤環，2008）。ここに子供を甘やかして育てる日本の閉鎖的な家庭の肖像が浮き彫りになっている。子供がニート（引きこもり）ではなく、家族それ自体が引きこもっていると分析する向きもある。このような社会現象の中で、一般大学生たちはどのような社会的危機的意識を抱いているのであろうか。バブル崩壊以降、彼らは社会から歓迎されない存在となった。それは又、格差が産んだ「鬼っ子」のような金銭至上主義の子供を産み落とした。「勝ち組」、「負け組み」に分類された彼ら仲間は、自らの実存に疑惑を抱き、自殺や殺人を安易に行ってしまう不条理な行動に駆り立てられた。このような21世紀初頭における日本人青年達の危機意識の流れを調査検討することは極めて重要である。

2：20世紀末における青年の危機意識に関する比較調査

A：日独青年の危機意識の構造

世界一の長寿国となった日本は高齢人口の増加、結婚適齢期の晩婚化と子供を生まない世代が少子化社会を形成するようになった。高齢者を支える青年男女の年金の不払い問題が浮上すると同じ時期に社会保険庁の不祥事が度重なり、社会不安をもたらし、これらの事件は将来に対する希望を失わせる事態を招来した。このような国家的犯罪を予測するような調査資料がある。1995年にドイツ人大学生と日本人大学生の社会的危機意識の調査を行った結果である（1996, 丸山, 1996 Maruyama, & Biebeler）、彼らの危機意識の構造は極めて酷似しており、日本人とドイツ人のメン

タリティが同質のものであることをうかがわせた。図1 A, Bによると、日本人大学生とドイツ人大学生の社会的危機意識の構造の核となる現象は「組織犯罪」であった。それが何を意味するのは当時の社会現象が極めて物騒な犯罪集団を形成していたことと関係が深い。その時代は、日本ではエリートの若者によって信仰されたオウム真理教、ドイツでは職を失った青年達のネオ・ナチ（極右翼過激派）運動が社会を騒がせていた。奇矯な教祖を中心に其の活動が政治にまで及んだ新興宗教集団と失業した青年達が職を求めて過激な行動を起こしたのである。これらは日本、ドイツともに若者集団たちによる集団犯罪行為であることは注意を要する。組織犯罪は従来までは、暴力団、

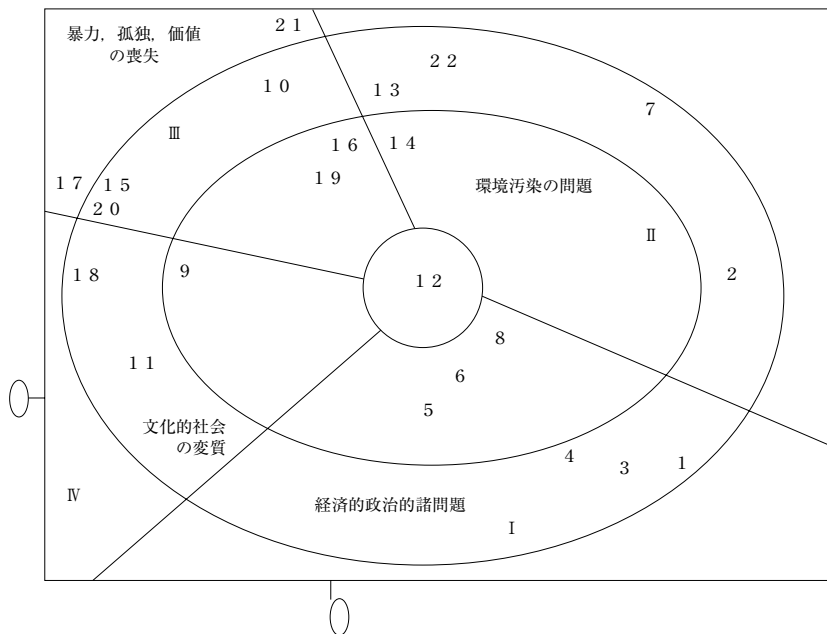


図1 A 22項目の2次元布置図（日本人青年）1995

22項目からなる社会問題についての不安程度

1 経済的状況	12組織化される犯罪
2 資源不足	13原子力発電
3 犯罪の増加	14エイズ
4 国家債務	15国民統制の強化
5 出生率低下	16テロリズム
6 年金危機	17亡命志願者
7 環境汚染危機	18右翼過激派
8 失業	19新興宗教
9 麻薬犯罪	20ホームレス
10孤立化	21遺伝子工学
11日本に住む外国人	22第三世界における急激な人口増加

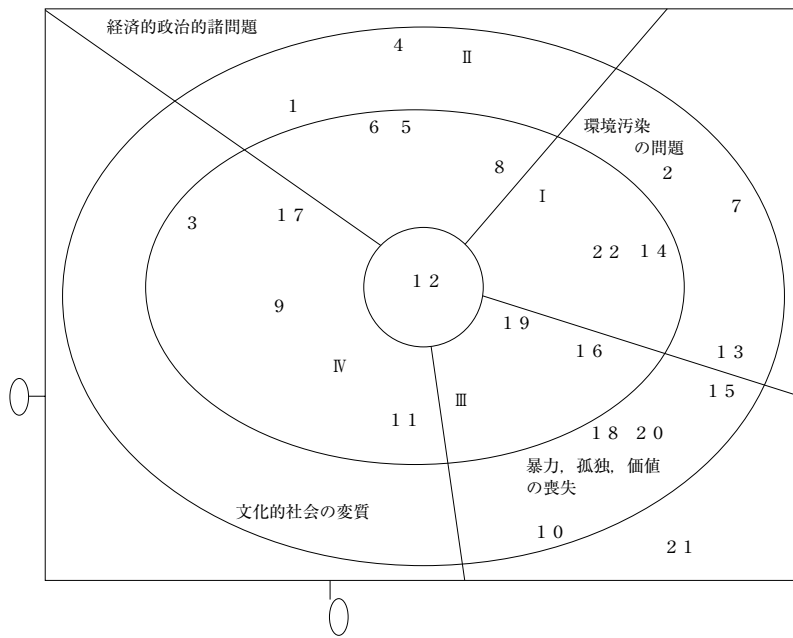


図1 B 22項目の2次元布置図（ドイツ人青年）1995

マフィヤなどの社会の陰に存在していたもう一つの集団であり、それが引き起こす数々の犯罪事件は日常的ではないとしても、耳目を騒がず犯罪事件につながっていた。翻って、20世紀後半の学生運動から派生した日本赤軍派が引き起こしたテロリズムは陰惨な光景をお茶の間に映し出し、彼らはその当時の日本国総理大臣の「生命は地球より重い」とするメッセージによって、人質の命と引き換えに北朝鮮やリビアなどの共産圏に釈放された。それが世界に与えた脅威はさすがに平和ボケした日本国民を震撼させた。未だに、其の当時、北朝鮮に拉致された人々の安否は不明で、むなしく政治的駆け引きの道具となっている現状に呆然とするばかりである。「人の命は地球より重い」とする高邁な思想は、それとは違反する思想の犠牲となって今日に至っている。今日「生命といのち」の問題がこれほど大仰に人の口に上ることに歴史の皮肉を見る思いである。社会的危機意識の俎上に上る問題はその時代を映す鏡の役割を果たすのである。

B：アイルランドと日本人青年の危機意識の構造

1999年—2000年にかけてアイルランド・ダブリンで行った同じ調査によれば、日本人大学生とアイルランド人大学生の間にまったくの一致は見られなかった。結果は図2 A, Bに示されるとおりである。この結果は、必ずしも、当時のアイルランドと日本の国情が異なるからというわけではない。調査当時日本では東海村の原子力発電遺漏問題でゆれていた。アイルランドではアイルランド共和軍「IRA」の動きが世情を騒がせていた。大学の前には屈強な警察官が見張番をし、大学の

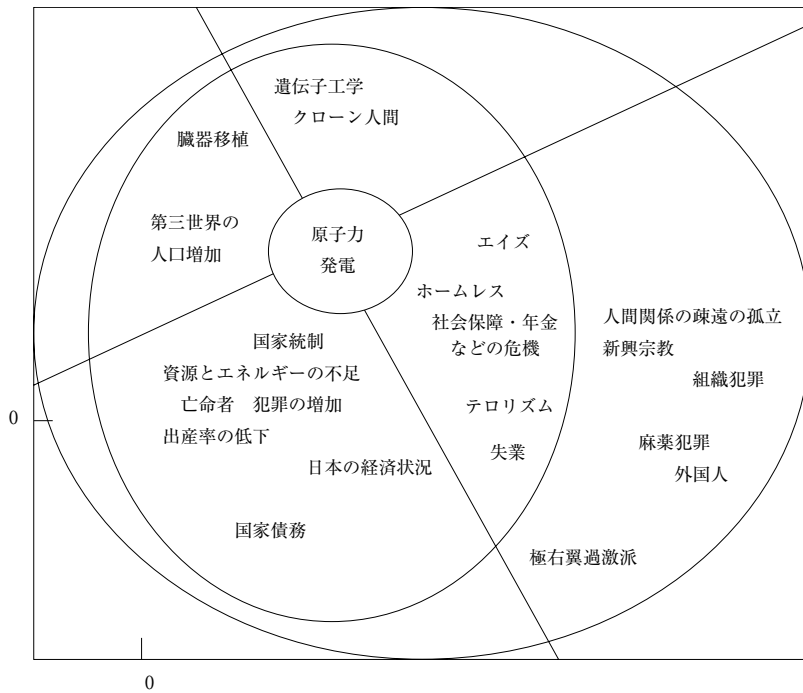


図2 A 社会問題に対する危機意識の空間付置図（日本人学生）1999

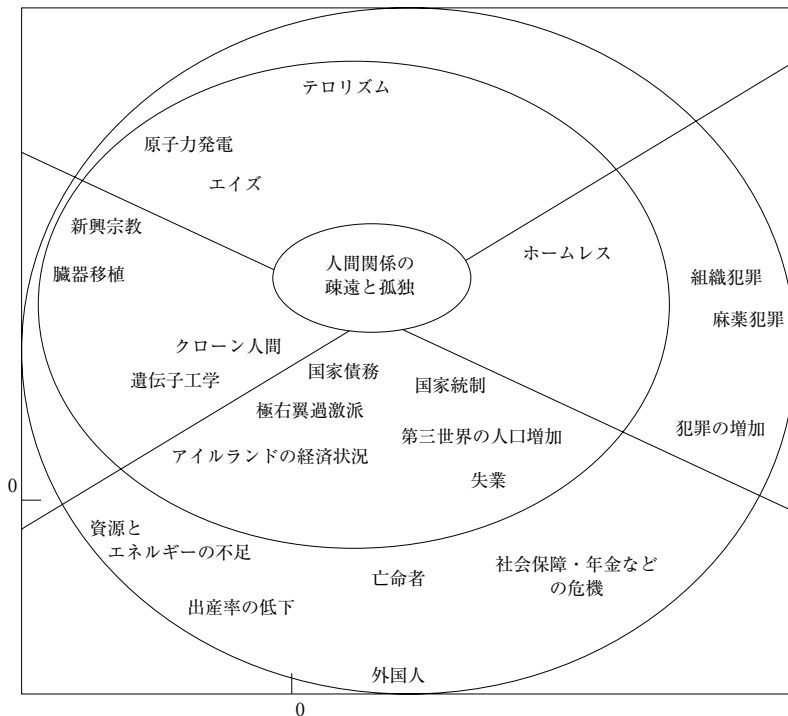


図2 B 社会問題に対する危機意識の空間付置図（アイルランド人学生）1999

門前でビラを配る大学生の貧弱な姿が印象的であった。当時の日本人学生の社会的危機意識の核となるのは、原子力発電に関する危機意識である。その管理の杜撰さに驚愕し、事故の範囲が拡大することを恐れた青年達が多かったのだろうか。スロビック（Slovic, 1987）によればリスク認知の最大のものは其の現象が未知のものであって、恐怖を掻き立てるものであればあるほど心理的危機意識の量は増大するという。未知であり恐怖を与える最大の現象は核爆発や原子炉の事故、放射性廃棄物の処理、遺伝子工学、クローン人間、環境ホルモン、地球環境汚染による生態系の変動や消滅など、今年は特に環境汚染に関する地球規模での大規模な行動が注目を集めている。日本は核爆弾に被災した世界で唯一の国であり、核爆弾に関する感受性は鋭敏である。したがって、社会的危機意識の核になるものは原子力発電の問題であった。ちなみに、アイルランドでは原子力発電所はない。彼らの危機意識は日本とくらべて相対的に弱いが、特に中心部に位置して核となる項目は「人間関係の疎外と孤立」であった。

アイルランド人には南北に分かれた民族の対立がある。北はイギリス領、南はアイルランド領である。彼らの宗教は前者がプロテスタント、後者はカトリックである。ここに新旧キリスト教の宗教対立がある。同一民族でありながら、宗教が異なるというだけで人間関係が疎外され孤立することに危機意識があるとすれば納得できる。民族の悲劇である。ヨーロッパにはその様な民族の間の対立がしばしば問題にされる。フロイト（Freud, 1930）は文化の発達は人間の幸福を保証するものではないという。なるほど、人間の価値判断は本人自身の幸福願望に支配されている。如何に栄耀栄華を極めた文化を持っている民族でも、本人自身が幸福に満たされなければ不毛の原野を歩くに等しい。文化が発達し、人々の生活が豊かになっても、本人に幸福の実感がなければ、人の心は癒されず、憂いだけがいや増す。フロイトは「神経症の原因は、社会が其の文化理想達成のために、我々に課する欲望断念の量に耐え切れなくなることであった以上、それらの文化的要求を取り除くか、または、大幅に引き下げれば、失われた幸福の可能性も戻ってくるのではないか」と述べている。それならば、神経症にならないために我々は原始時代と同じ時代へ逆行できるのか？それは不可能である。自然を楽しみ、緑風にあたるための森林浴を健康増進のために、時折寸暇を惜しんで行うことは出来る。しかし、それは持続的ではなく一時的な生活場面の变化である。一度獲得した文明の利器を人は容易に放棄することが出来ない。プロテスタント・キリスト教のメノナイト派のような生活習慣をよいものとして取り入れるためには、宗教的戒律や価値観の他に、其のような生活体系を生まれた時から習慣的に体得している必要がある。フロイトの見解に従えば、現代人は現代文明の陥穽ともいべき様々な社会病理を抱えながら、未来に対する不安に苛まれ、明日の方向を見失って呻吟する姿が彷彿としてくるではないか。彼らは幼児退行的不安、神経症的不安の典型的な症状、人生の不快な部分から目を背け、刹那的な快楽に時間を忘れ、幼児返りの行動を繰り返し、他者への思いやりや自分の内面的孤独から目をそらし、体裁をつくりいながら「気を使って」生きている。そうしなければ周辺の人々からいじめられるからである。このようにして、

思春期になって生ずる精神的懊悩（自己の真実の存在の意味を問いかける実存的痛み）を回避し、心と身体が分離して、心の病を増幅させ、ますます神経症的不安に駆られ、永遠に大人になれない子供たちが増える結果を生んだことになる。1992年6月に大学生を対象にして次のような調査を行った。サンプル・サイズは男子は300人、女子244人である（丸山、1993）。「もし、この社会が混乱し未来に対する希望が持てないカオスの状態になった時、あなたはどのような「生き方」を選ぶか」という設問に対して、選択肢は5通りである。1：快楽指向（唯其のときの快楽に身をゆだねる、自殺や殺人もこの範疇に入る）、2：革命指向（過激な手段によって社会の改革を断行する、戦争、紛争、テロも含む）、3：宗教指向（カオスからの救いを求めて神仏に帰依し祈る）、4：成り行き指向（自分からは何もせずその場の成り行きにゆだねる）、5：無関心（何も考えず普段していることをする）。表1に結果が示されている。男女ともに無関心が全体の40%近く、それが第1番目の生き方である。続いて2番目は男子は革命指向、女子は宗教志向と成り行き指向が比較的高い数値を示した。相対的に彼らは社会に起こっている危機的状況への関与が薄く、それらを回避する傾向を示した。1995年にドイツ人大学生と日本人大学生とを比較した。ドイツ人大学生は第1が革命指向、第2が無関心、女子は第1が宗教指向、第2が無関心、日本人大学生は男女ともに成り行き指向が高い数値を示した。更に、1999年にアイルランド人大学生と日本人大学生を比較するために同様の調査をした結果、アイルランド人大学生は男女ともに第1が快楽指向であり、日本人大学生は男女ともに成り行き指向と無関心であった。

それぞれの国民性、民族性が際立っているにしても、日本人の男女大学生、一般的に18歳から25歳までの青年男女は自ら事を成すことに消極的であることが窺える（丸山、1996、2000）

表1 混乱した社会の生き方（1992）

	男子	女子	全体
快楽指向（ヘドニズム）	2.83	3.02	2.91
革命志向	2.81	2.31	2.58
宗教指向	2.29	2.88	2.55
成り行き指向	2.93	3.32	3.09
無関心	3.26	3.42	3.33

注：5段階評定 1は反対 5は賛成

C：テロリストたちの世紀

かつて団塊の世代といわれた学生達は社会の不条理に反駁して全共闘組織を作り、学生運動を展開し日本赤軍という世界的テロリストへと変貌して行った。今更のように、この事件を蒸し返し議論することに幾許かの躊躇いがあるとしても、敢えてそれに取り組むのは、現代青年の精神構造を分析する上で、極めて意義深いものがあると思うからである。

1969年後半になって世界的規模で学生運動が盛んになった。日本においては、団塊の世代の学生たちが大学運営に不満を持ち、過激派集団となった大学生が全共闘を組織し、大学の教授たちを人民裁判にかけ、学生の自由と権利を主張し授業は一切行われず、大学は全共闘に封鎖され、人質になった大学教授達の健康状態が危ぶまれる程に荒廃した。大学内では過激派集団のセクト（中核、ブント、核マルなど）間の争いで「内ゲバ」が絶えず、教室を占拠した彼らは血で血を洗う殺人者集団と化した。後に彼らは日本赤軍という世界的に名を馳せたテロリスト集団となり、1972年のロッド空港襲撃による無差別テロ事件、1973年に日航機ハイジャック・爆撃事件を起こした日本赤軍は日本人過激派集団となって数々ののっとり、爆撃、占拠事件を起こした。彼らの多くはエリート学生集団で、一人っ子であることから心理学的には一人っ子は理想を求めて革命に走りやすいと診断された。このような状況を生んだ原因を社会学者（香山健一、1975）は以下のように分析している。過激派学生たちのこうした反社会的犯罪行為の大量発生の原因は日本の社会的背景にその根があるという。即ち、彼らは戦後の焼け跡で敗戦直後に政府の政策である「生めよ、増やせよ」との掛け声で大量に誕生した子供たちの集団である。この集団が一塊になっていることから「団塊」という名称が付与され、別名、全共闘世代、ビートルズ世代とも言われた。こうした一塊になって存在する若者たちは社会が必要とする人材でもあり、出来るだけ彼らの要求を満たすべく、過保護に育てられた子供たちでもあった。人数が多いのでいたるところで、彼らは競争を強いられ、それ故に自由が奪われたと感じ、マルクスやスターリン、毛沢東を信奉した。彼らは狂信的な社会主義者、共産主義者となった。この土壤が厳然と日本社会に存在しているのだと香山氏は主張する。即ち、過激派学生たちの狂気を育てた原因は日本社会に厳然と存在し、その中に潜んでいるある恐るべきメカニズムが、彼らの狂気を引き出したのである。その社会的メカニズムとは何であろうか。この社会的メカニズムを社会病理学的に分析することによって、若者たちの未熟で理想追及的な精神構造を是正しなければならない。先ず第1にあげられるのは1950年から60年にかけて、日本国における左翼内部におけるスターリン批判の不徹底性と欺瞞性にある。国際的スターリン批判において日本国左翼陣営はあいまいな態度、動揺、混乱、保身に終始していた。中国共産党はスターリン批判を反革命的、修正主義的と反論して拒否、日本共産党はこれに同調する態度を見せた。しかも、日本国全体がこのスターリン批判に生半可な態度を取ったのである。まして、スターリン個人崇拜を必然的に生み出した社会主義体制のメカニズム、共産主義、思想、理論、方法、組織体質に至るまで徹底的にメスを入れてこなかったのは日本共産党にある。第2に教育、ジャーナリズムに横たわる生半可な平和主義である。平和な社会の形成は過保護に育ち、自制心の足りない過激な体質、かつとなりやすい耐性欠如で暴力志向の子供を大量につくりだした。切れやすく無差別に人を殺すタイプの犯罪である。日本国憲法には権利という条項は沢山あるが責任という条項が殆ど見当たらない。根本的に日本国憲法支持者は自分の権利主張をのみ優先し、他者の権利を侵害している。戦後の子供たちは平和主義の名の下にはじめる「戦争ごっこ」のイメージを刻印されてしまったのである。

戦後日本が背負っている無意識のトラウマの中で、教育とマスコミによる情報垂れ流し状態の犠牲者として現代青年の狂気が醸成され、奇形化されて無差別テロの温床を生み出したのだと分析している。確かに、どういうわけか、マスコミ関係では朝日新聞、岩波書店の「世界」に存在する左翼陣営は未だに健在であるかの錯覚を起こす。香山氏の論点は結局、日教組の教育、左翼陣営を補佐する論調をかもし出すマスコミにその責任があるというのであろう。それはともかく、我々は現在の社会を見渡すべきであろう。無差別に誰でもよいから「殺す」閉鎖的でネット依存症の青年達の引き起こす殺人事件は、あまりにも明々白々で何処にも影や謎がなく、議論の余地がない。実存的孤独にさいなまれ、太陽が照っているから殺人を犯したという不条理の文学ですらない。

一体21世紀の青年達は何を基準に将来を見つめ、自らの生き様を見定めなければならないのだろうか。イデオロギーのない社会における閉塞感は、恐らく、物質だけに頼り、嗜癖行動障害者を量産させる。格差社会といわれる今日、人は成功の夢を手っ取り早く無差別テロに託すのであろうか。

21世紀初頭の9月11日に起こったニューヨークの世界貿易センターをイスラム原理主義集団「アルカイダ」のテロが起こってから5年後の同じ日に、日本では「郵政解散」として知られる総理大臣小泉純一郎のワンフリーズ・テクニクに踊った若者達が、積極的に投票所へと駆けつけ、これまでの投票率を格段に上昇させた。脱地元利益優先、脱地縁的集票行動が顕著になった。無党派層を形成する若者達が小泉総理によって選出された小泉チルドレンに投票し、結果的に自民党を圧勝させた。小泉チルドレンと呼ばれる団塊ジュニアの世代が政治の場に躍り出たという感じは否めない。小泉チルドレンの中にホリエモンこと、IT産業のライブドア社長堀江貴文がジャーナリズムを沸かせた。団塊ジュニアと呼ばれた団塊の世代の子供たち、「拝金主義の申し子」として社会的反響を呼び、犯罪者となったホリエモンは社会のヒーローになりかかった。ワンフリーズ・ポリテックスの波に乗って衆議院選挙で最も厳しいとされる地域に忍者として名乗りを上げ、其の地元の大物政治家を戦慄させたが、結果的に敗退した。かくして、今ではホリエモン熱も冷め人の口に上らなくなったが、莫大な資金を繰り出してモラル・ハザードを引き起こし、政治家達すらその波に乗ってホリエモンを衆議院選挙で闘わせたという事実は残る。政治的関心を示したときから彼は其のあおりを食らって、自らの生き方に終止符を打ったことになる。ホリエモンはある意味で善悪は別にしても青年のエネルギーを前向きに評価しうる若者達の活性源、潤滑油の役目を果たしていたと見る向きもある。しかし、司法は彼の金融犯罪を許さなかった。金まみれの人間が自らを「神」と称し、すべてのものは金で買えると豪語した。確かに金に群がる葉虫はどこにでも存在し、彼らを金で買うことは可能であろう。この現象は人々の好むところではない。成金を好まず武士の魂を貫いて、清貧を生きる江戸時代の日本人の本質はある意味でキリスト教の修道僧と似ているかもしれない。どこの世界でも成金は嫌われる。ロシアの文豪ドストエフスキーは「金銭が嫌われる所以は、それが人に才能さえ与えるからだ」という。金に目がくらんで経済大国になった日本人が世界から嫌われる所以である。人間関係はいかなる事でも金銭だけでは解決は付かず、それを表面化させる

と、人間の反感を買い遠ざけられることを知る必要がある。すでに、日本人は湾岸戦争でこの事実を痛感している。それはともかく、神無き社会における神は「自己」であり、それに翻弄されて滅び行く人間の悲哀は既に実存主義文学が示唆するように、救済しなければならない人類の典型として描かれている。「愛」という言葉でしか表現できないそれら救済の道を、筆者には「福祉」活動が保証してくれるのか否かを判断する立場に無い。

テロリズムの温床はすべからず愛の欠如に始まり、金銭物質の不足から、理想的社会を築くために犠牲となって自爆する犠牲の山羊で終る。金銭的には恵まれてはいるが、愛の欠如のために世界制覇の夢を追い、貧しく虐げられている人を楯にして、テロリズムを実行する恐るべき影の人間の存在を十分に知るべきである。

3：21世紀における青年の社会的危機意識構造

既に、20世紀末の国際比較研究において、日本人青年男女のその時代の社会的事情によって危機的意識構造が異なることが分かった。21世紀になって、2007年に同様に調査を実行した結果を概観してみよう。

調査目的：現代青年の社会的危機意識を調査し、20世紀末（1992年－2000年）から得た調査結果と比較検討する。

被 験 者：東京都区内、近郊の大学に通学する男女大学生300名（男子：180人、女子：120人）

調査日時：2007年6月上旬

結果の考察

アメリカで勃発した航空機による自爆テロによって、末永く世界の平和や安寧を願う多くの人々は衝撃を受け、その後の報復措置として起こったアフガニスタンへのテロ撲滅を大義とした戦争は、21世紀の幕開けにおける極めて象徴的な出来事であった。地域紛争が世界の端々で起こり、紛争に明け暮れ、傷つき倒れた老若男女の数は我々の想像を遥かに超えている。加えて、自然災害、食料不足はもとより、現代の「錬金術師」たちは世界を巻き込んで歯止め利かない「マネー・ゲーム」に走り、金融危機をもたらし世界経済のバランスを崩しながら、一層の貧困を助長した。更に突発的な猟奇的殺人事件など、負の側面を鳥瞰すれば滅び行く人類の兆候をいたるところに垣間見ることが出来るであろう。世界がこのような不安のなかで慄いている時、日本の社会は政治的混乱が続き、長い間の自民党政治がにわかに崩れてゆく予兆を醸し始めていた。それは、既に述べたように21世紀の初頭9月11日に起こった航空機爆破テロ事件から5年後の同じ日に、時の総理小泉純一郎の唐突な郵政解散の結果に由来する。大多数の自民・公明党の議員による強権発動によって日本

国の年金制度や医療制度を可決させ、その弊害が今日の医療・福祉分野で混乱を招いている。つまり、基本的な政策を知らずとも官僚の描いた無謀なシナリオを、所謂小泉チルドレンは圧倒の多数で可決し、今日の医療・年金問題を深刻なものとしたのだといえる。いみじくも世界に君臨していたアメリカの証券会社、リーマン・ブラザーズは破産宣告をした。金融市場は混乱し、「拝金主義」を貫いたホリエモンを後押ししたこの証券会社はマネー・ゲームの付けを払わされたのである。たんにこのゲームが一介のセレブな人たちのゲームであるならば、それがどのようなだろうとも一向に構わないが、貧困層を巻き込んだ劣悪なこの集団の破綻に救済の手を伸ばすものはいない。

さて、2007年6月の調査結果を図3から検討してみよう。時代が変り、学生たちの生き方の選択にはこれまでの調査と比較して若干の相違がある。混乱した社会に対して無関心の度合いは相変わらず強いが、男女差が見られる。男子の無関心振りが目立つ。しかし、男女共に成り行き志向であることには変わらない。今日、日本では年金・医療問題、環境問題などに対する危機感が強いが、彼らはそれらの問題に対して積極的に動く気配も無く、成り行きに任せるという消極的な態度である。世界中が金融問題、紛争問題で索漠としているのだが、直接自分たちの生活には影響が無いといわんばかりに、一見平和で温和に見える日本国の状況に満足しているかのようなのである。何事も現状維持であることが望ましく、成り行きを見守るという態度は日本人特有の価値観であることは否定できない。

22項目の2次元空間布置図は図3に示されている。それによれば、青年達の社会的危機意識の構造は、3つのクラスターに集約されている。第1は日本の経済的状況、国家の債務問題のほかに年金の保障問題や自然環境汚染問題、更には経済的犯罪の増加に危機感を持っているクラスターであ

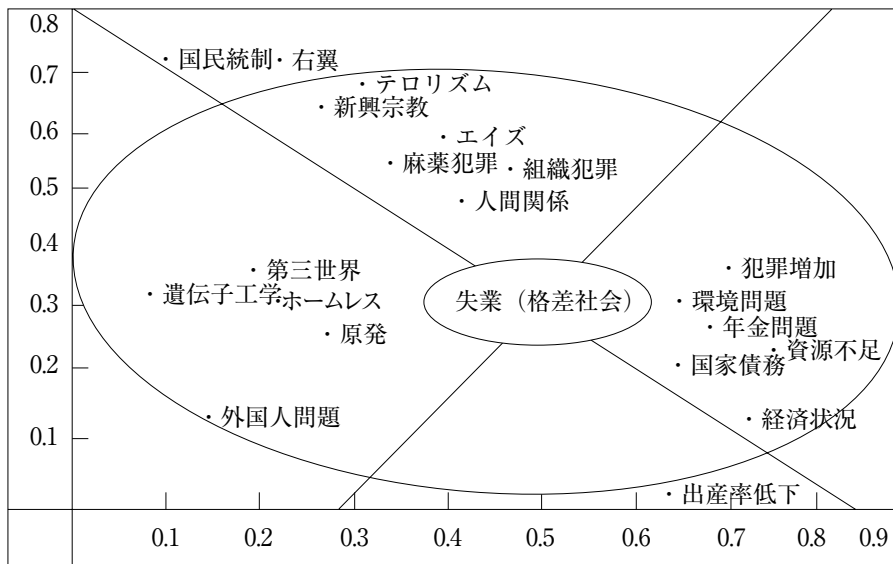


図3 二次元空間布置図 (2007, 日本人大学生)

る。この場合の経済的犯罪とは政治家の汚職や国家の年金流用・詐欺犯罪などに該当するであろう。そのほかに、このクラスターの中には出生率の低下、食料資源やエネルギーの枯渇問題が含まれている。第2のクラスターは暴力・犯罪の問題で、右翼過激派（暴力団）、新興宗教、テロリズム、麻薬犯罪、組織犯罪など今日話題になっている暴力団の一般市民への関与や過激な活動に危機感を抱いているクラスターである。その他、このクラスターにはエイズなどの感染症が含まれている。第3クラスターは原子力発電、食料汚染を含む遺伝子工学の問題、第三世界の紛争や人口増加と貧困、日本に住む外国人の問題、ホームレス、人間関係の疎外や孤立の問題が浮上している。これら3つのクラスターの核となるのは「格差社会」といわれる失業・倒産の問題である。

このような21世紀初頭の危機感は20世紀末のそれと似ているが微妙なところで異なっている。構造改革が生み出した「格差社会」は、バブル崩壊後の経済的危機から脱出した安心感と同時に、一億総中流意識であった日本人の中に格差が生じ貧富の差が生じ、超高齢社会の中で、次第に顕著になってゆく傾向が見られる。確かに、バブル崩壊を食い止めるために不良債権やリストラなどでその危機は脱したものの、個人の収入には格差が生じた。若者たちがホームレスまがいの生活を余儀なくされることによって、格差社会という名称が生み出されたものといえる。つまり、現代青年が未来に対して希望にあふれ、平安に生活するには、尚不安が残るということである。個人の生活を重視するという価値観から、人間関係の疎外や孤立、「引きこもり」やニートの増加など、21世紀初頭、青年達は20世紀において求められた人間関係の連帯感や親和性が、次第に稀薄になっているという実感を持ってしまった。そのことは、今日の社会に見られるスピリチュアル・ヒーリングの流行に現れている。即ち、彼らは個人の殻に閉じこもり、他者への眼差しを忘れ、自分が癒されることだけを考え始めたのである。社会福祉の現場は弱者へのいたわりや福祉をないがしろにした犯罪が次々と露呈されると、福祉の担い手は次第にその現場からはなれ、他者へのまなざしや愛を忘れてしまう傾向にある。若者たちが活気あふれ、未来への希望を熱く語りあえるような社会をいかに形成できるかが問われている。

参考文献

- 丸山久美子 1992 20世紀末を生きる現代青年の地球規模における社会不安と危機意識に関する若干の考察「論集 キリスト教と諸学」— 聖学院大学 — Vol. 7
- 丸山久美子 1994 緩和医療と臨床社会心理学「社会心理学研究」第9巻 第2号 123-130
- 丸山久美子 1995 20世紀末現在の日本社会の光と影「聖学院大学論叢」第7巻 第2号 145-158
- 丸山久美子 1996 自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る— 日独青年の社会問題に対する不安感の比較研究 — 「聖学院大学論叢」 第9巻 第1号 101-118
- 丸山久美子 ヘンドリック・ビベラー 1996 日独大学生の「生と死」への態度に関する比較研究 「聖学院大学論叢」 第8巻 第2号 191-222
- 丸山久美子 2001 青年の社会的危機意識に関する構造の比較研究— アイルランド人・日本人大学生の価値観を探る — 「聖学院大学論叢」第13巻 第2号 175-186

Slovic P. 1987 perception of risk [Science] No.236 280-285